



決め手は、青森県産。

特産果樹生産情報第7号
(最終号)



平成30年10月5日発表
青森県「攻めの農林水産業」推進本部

**台風第25号に備え、風害防止対策を万全に！
収穫後は、園地の清掃と雪害防止対策等をしっかりと!!
核果類は、休眠期のコスカシバ防除の徹底を!!!**

I 要 約

- 10月5日仙台管区气象台発表の東北地方週間天気予報によると、7日頃は日本海側を中心に、台風第25号の影響で暴風となる見込みであるため、臨時農業生産情報や、市町村・JA等の台風情報に注意し、風害防止対策に万全を期す。
- 収穫後の園地は、10月上旬～中旬に施肥（標準施肥量の60～80%程度）し、残りは翌年春に施肥する。
- 園地の清掃を行い、酸性土壌の改良や野ネズミ対策及び雪害防止対策を徹底する。
- おうとう、もも、うめ・あんずなどの核果類は、休眠期のコスカシバ防除を徹底する。

II 生産情報

1 生育概況

露地ぶどうのスチューベンの収穫始めは、鶴田町（県生育観測ほ）で平年並の9月27日であった。

西洋なしのゼネラル・レクラークの収穫始めは、南部町（県生育観測ほ）で平年並の9月18日であった。

2 今後の重点作業

(1) 風害防止対策

10月5日仙台管区气象台発表の東北地方週間天気予報によると、7日頃は日本海側を中心に、台風第25号の影響で暴風となる見込みであるため、臨時農業生産情報や、市町村・JA等の台風情報に注意し、風害防止対策を行う。

ぶどうの垣根、なし棚、ハウス施設等を点検し、支柱等で補強する。

収穫適期に達した果実は、速やかに収穫する。降雨時に収穫する場合は、果実に泥が付着しないよう注意する。

(2) 各樹種共通

ア 施肥（基肥）

ぶどう、おうとう、もも、うめ・あんずの成木における施肥（基肥）は、下表を目安に実施する。施肥量は、各樹種とも土壌条件や樹勢に合わせて加減する。

基肥の施肥時期と施肥割合

	施肥時期	標準施肥量(10a当たりkg)			施肥割合 (標準施肥量に対して)
		窒素	リン酸	カリ	
ぶどう	10月上～中旬	15	10	10	60～80%
おうとう	10月中旬	15	6	12	80%
もも	10月上旬	14	6	10	80%
うめ あんず	10月上旬	14	6	10	80%

イ 園地の清掃

病害虫は落葉や落果で越冬して翌年の発生につながるものが多い。このため、今年、病害虫の発生が多かった園地では、越冬菌等の密度を低下させるために、落葉や落果を集めて土中に埋めるなど処分する。特におうとうの灰星病のミイラ果は見つけ次第摘み取って、園地外で処分する。

ウ 土壌改良

(ア) 有機物及び石灰質肥料の施用

土壌が酸性化すると、生育、収量、品質などに悪影響を及ぼすので、あらかじめ土壌診断を行い、自園の状況を把握する。

(分析の依頼先：JA全農あおもり土壌分析センター又は最寄りのJA等)

各樹種の改良目標値は、ぶどうではpH(H₂O) 6.0～6.5、なし、おうとう、ももではpH(H₂O) 5.5～6.0である。

有機物や石灰質肥料を施用した後は、5cm程度の深さまで軽く耕起する。

なお、初めて耕起する園地や近年耕起していない園地では、断根による悪影響を避けるため、晩秋に行う。

(イ) 排水対策

耐湿性は樹種で異なり、おうとう、ももは特に湿害を受けやすい。

一般に地下水位の高い園地では、地下水位がぶどうでは80cm以下、おうとう、もも、なしでは90cm以下になるように暗きょ等の排水対策を実施する。

エ 苗木の植え付け

老齢樹や障害樹、欠木の多い園地では、若返り対策を進める。

植え付けは、津軽地方では多雪、県南地方では土壌凍結による苗木への影響が大きいことから、春植えが望ましい。春植えは4月中旬頃までに行う。

排水不良地では、植え穴に水が集まり湿害を受けやすいので、排水対策を行ってから植え付ける。

オ 野ネズミ対策

餌となる果実や作物の残さなどを片づけて園内を清掃し、草生、敷わら等をしている場合は、幹の周囲を清耕にして、野ネズミが巣を作るのを防ぐ。

特に、苗木や若木は被害が多いので、晩秋に地上1mの高さまで(積雪の多い所ではさらに上まで)、金網や肥料などの空袋、合成樹脂のプロテクターなどの被覆材料を巻き付けるなどして食害を防止する。おうとうでは樹冠下に忌避剤(フジワン粒剤)を処理して食害を防止する。

また、果樹園で使用できる殺そ剤を使用し、野ネズミの密度低下に努める。殺そ剤以外では、ネズミ取り器を園地に仕掛けて捕殺する。石油缶を利用する場合は、上面に10cm程度の穴を開けた石油缶を地上5cmくらい出るようにして土中に埋め、缶の中に餌を入れ、缶の上におわらを敷いて雨水が缶の中に入らないように屋根をかけておく。

なお、忌避剤や殺そ剤の使用に当たっては、農薬の使用基準を遵守する。

カ 雪害防止対策

(ア) 積雪前の対策

苗木では支柱を立てて、縄などで2～3か所結束する。多雪地帯では雪害を受けやすいので、特に結束もれのないように注意する。

成木では、雪害を受けそうな枝には、支柱を入れる。また、空洞や裂開の生じている樹には、かすがいかボルトを用いて補強する。

不要な枝を大枝単位で剪去する。

(イ) 積雪期間中の対策

大雪の際は、まだ雪が新しく軽いうちに、樹の雪下ろしを行う。

雪中の枝先は、雪が新しいうちに抜き上げる。

雪に埋もれた下枝は、融雪期に入ったら随時園地を見回り、枝を引き上げる。

融雪促進のため、融雪促進剤を3月上旬～中旬に散布する。

キ 核果類のコスカシバ対策

被害が見られる園地では、落葉後、下記の薬剤を選択し、枝幹部及び地際部に薬液が十分かかるようにていねいに散布する。

薬 剤 \ 樹 種	おうとう	も も	初刈ン	うめ・あんず	すもも
ガットキラー乳剤 100倍	○	○	○	○	○
ラビキラー乳剤 200倍	○	○	—	—	—

(3) ぶどう

ア 収 穫

これから収穫となる晩生種は、適期に収穫する。シャインマスカットは果皮色の変化が少ないため、外観からでは収穫適期の判定が難しいので、糖度を測定してから収穫する。収穫時の糖度は18%を目安とする。

なお、収穫時の留意点は、平成30年9月3日発表の特産果樹生産情報第6号を参考にする。

イ 剪 定

剪定は落葉後早めに行う。特に多雪地帯では、雪害を受けるおそれがあるので遅れないようにする。

剪定法には、結果母枝を1～2芽残して切る短梢剪定(図1)と5～10芽残して切る長梢剪定(図2・3)の2種類があり、下表のとおり品種ごとに望ましい剪定法を選択する。

晩腐病や黒とう病などの越冬源となる架線の巻きひげ及び被害枝は、必ず除去して処分する。

垣根仕立てにおける品種と望ましい剪定法

剪定方法	品 種
短梢剪定	キャンベル・アーリー
長梢剪定	スチューベン、シャインマスカット

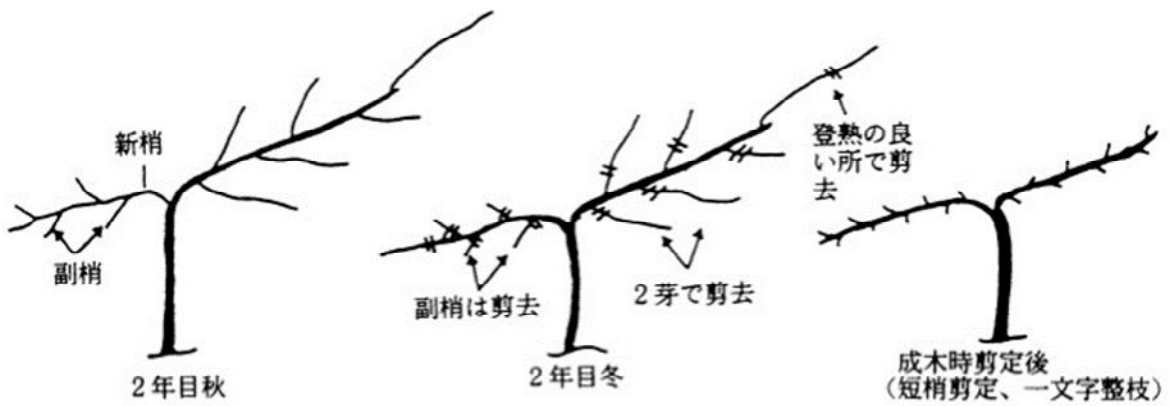
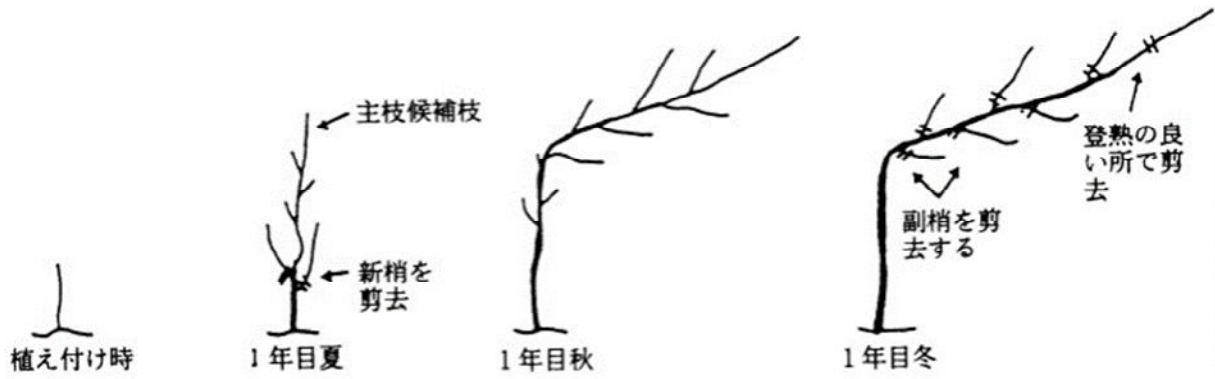


図1 短梢剪定の仕立て方

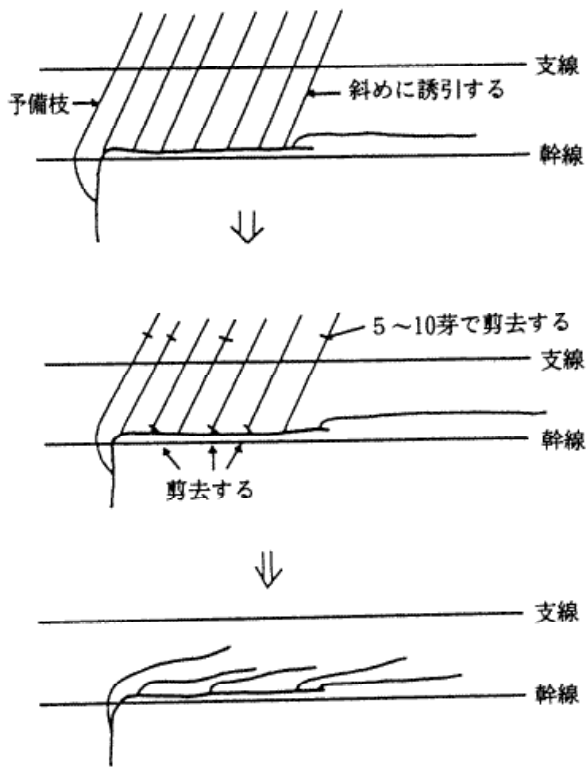


図2 長梢剪定の剪定方法

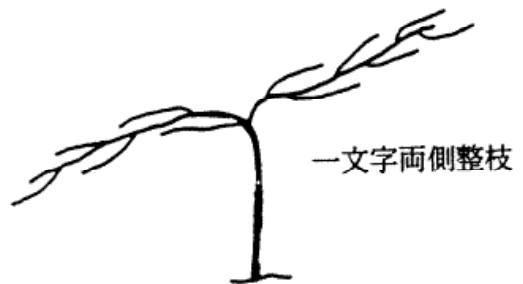


図3 成木時の長梢剪定後の樹姿

ウ 眠り病防止対策

眠り病は、スチューベン等で着果過多、結果枝の徒長、遅伸びなどにより樹体の充実が悪いと発生しやすくなる。

発生が懸念される場合は、寒さや乾燥から樹体を保護するために、主幹や主枝部を稲わらやポリエチレンフィルムなどの防寒資材で被覆する。

なお、春遅くまで被覆しておくとも発芽が早まり、晩霜害を受けることがあるので、4月に入ったら早めに防寒資材を除去する。

エ 褐斑病（キャンベル・アーリー）及びべと病（スチューベン）対策

褐斑病及びべと病の越冬源となる被害落葉は集めて処分する。

（4）もも

ア セン孔細菌病対策

病斑を形成している枝の除去を徹底する。

イ 縮葉病対策（平成31年春）

「発芽前」（3月下旬～4月上旬）にキノンドー水和剤40の500倍、チウラム剤500倍、石灰硫黄合剤7倍のいずれかを散布する。（チウラム剤：チオノックフロアブル、トレノックスフロアブル）

「発芽前」は縮葉病防除の基本となるため、ていねいに散布する。

（5）なし

ア 西洋なしの収穫

これから収穫となる晩生種は、適期に収穫する。ラ・フランスの収穫始めの目安は、満開日からの日数が165日、ヨード反応指数が1～1.5、地色指数が2～2.5であり、これらの状況などから総合的に判断する。

この他、追熟方法等については、平成30年9月3日発表の特産果樹生産情報第6号を参考にする。

イ シンクイムシ類対策

被害果は、園地内に放置せず、園地外に運び出し、7日間以上水に漬けるか、穴を掘り10cm以上の土をかぶせて埋める。

（6）うめ・あんず

ア 縮葉病及びカイガラムシ類対策（平成31年春）

「発芽前」（3月中旬～4月上旬）に石灰硫黄合剤7倍を散布する。「発芽前」は縮葉病防除の基本であるので、ていねいに散布する。

カイガラムシ類の発生が多い樹では、ワイヤーブラシ等で、越冬成虫を落としてから石灰硫黄合剤を散布する。

